



長野県No.1 のもも・ネクタリン産地を守ろう！

◆生育状況については果樹総合情報を参照

1. JA管内 川中島白桃

	発芽	開花	満開	落花
平年	3/25	4/13	4/20	4/28
令和7年				
令和6年	3/31	4/12	4/18	4/25
令和5年	3/14	4/2	4/9	4/15

◆当面の重点作業について

1. 凍霜害対策を万全に行う。
2. 開花期前後のかん水を行い、人工受粉の徹底、結実安定・大玉生産を図る。
3. 摘蕾を適期に実施する。※実施方法等は、前回情報参照。
4. せん孔細菌病対策を徹底する。

【もも・ネクタリン薬剤防除】

◆第2回薬剤散布について

1. 散布時期: 開花直前 散布日 月 日

2. 調合量: 水100ℓ 当り ※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
固着性展着剤アビオンE	66mℓ	—	—
IC ボルドー 412	3kg	せん孔細菌病	—

3. 散布量: 10a 当り = 350ℓ 以上

4. 留意事項

- ① 散布直後に降雨に遭うと、薬害発生、効果低減になる。
- ② 薬液調合後、沈殿が始まらない間(調合後6時間以内)に散布する。
- ③ ももは、ic ボルドー 412 に代えて 4-12 式ボルドー液(水 100ℓ 当り生石灰 1,200g + ④ 硫酸銅 400g)を使用してもよい。ネクタリンには登録がない、4-12 式ボルドー液並びに ic ボルドー 66D は使用できない。
- ④ 住宅・駐車場の近くで汚れを心配される場合は、ボルドー液に代えて、ムッシュボルドー DF500 倍(水 100ℓ 当り 200g)を散布してもよい。
- ⑤ アビオンE に代えて、K. K ステッカー 3,000 倍(水 100ℓ 当り 33mℓ)を使用してもよい。
この場合、必ず K. K ステッカー は、ボルドー液調合後に混用する(凝固するため)

◆人工受粉徹底と開葯について

川中島白桃等は、自家(花)受粉では極めて結実が悪く、人工受粉が必須作業になる。

人工受粉徹底のため、積極的に開葯所を利用し、花粉を確保する。

1. 人工受粉を必要とする品種・・・川中島白桃・なつき・さくら・黄ららのきわみ・西王母等

※川中島白鳳・黄金桃等も実施すれば、品質(生理落果減等)の安定につながる。

※受粉する品種の開花に合わせて花粉を用意する。花粉の寿命は短く有効期間は1週間程度。

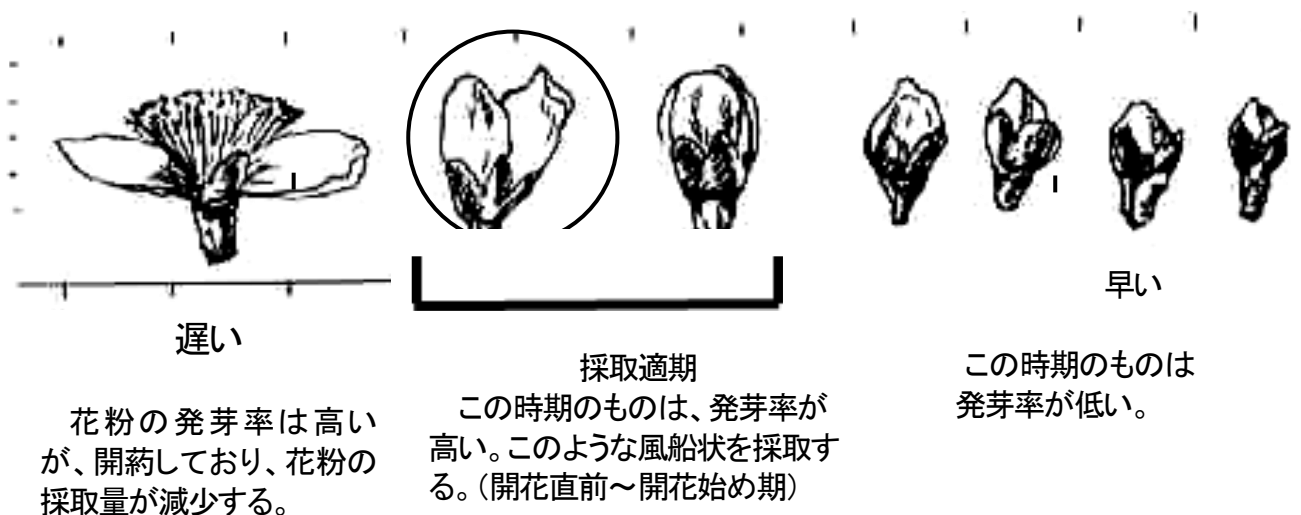
2. 開薬品種(花粉・花量の多い品種)

あかつき、白鳳(千曲)、黄金桃、白根白桃、なつっこ、フレーバートップ、ファンタジア

なお、主要品種では、川中島白鳳、サマークリスタル、秀峰等も花粉がある。

3. 10a当り必要花粉量・・・花蕾で1kg位(収穫カゴ一杯位)

図 花の採取適期 ※開花直前(風船)～開花直後(未開薬)を採取。



4. 人工受粉にあたっての注意事項

1) 5分咲き(下枝)と満開期(上枝)の2回実施する。特に上枝を重点に行う。

2) 開花当日～4日後程度の中に受精能力がある。なかでも2・3日目が最も良い。

① 花弁が白色からピンク色に変わったものを狙うと良い。

② 上枝と下枝、枝先と枝基では開花時期が異なるため注意する。

3) 早朝等を行わず、気温の上がった(気温15℃以上、気温20℃適温)、午前10時～3時頃を目安に行う。

4) 夕方寒くなったら翌日に行う(15度以下になると花粉管の伸びが低下するため)

5) 着果させたい所だけ狙いを定めて受粉する。後で摘果が軽減される。

6) 開花期間が長くなり保存期間が長くなった花粉は使用しない。

◆弱樹勢対策のチッソ施用について

1. 施用時期: 満開～落花期(落花5～7日後頃まで)

2. 施用量: 有機専科10a当り1袋又は、ノルチッソ10a当り0.5袋 ※老木は2倍施用する。

3. 留意事項: 実止まりが多すぎると樹勢が弱りやすいので施用する。かん水も併せて行う。

◆灰星病対策について

灰星病は、せん孔細菌病と病斑の症状が似ている。区別がつかなくとも、共に処分する。症状は満開期頃から見え始めるので、一斉点検を行う。

開花期に「花腐れ」症状となっている部位がある。発見したら早急に、病斑部の切除を行い、切除した病斑部は、焼却処分の実施を徹底する。

◆せん孔細菌病春型枝病斑を除去しよう！！

※農薬散布だけではせん孔細菌病は撲滅できない。

春型枝病斑の点検・切除・処分一連の作業は撲滅の必須作業

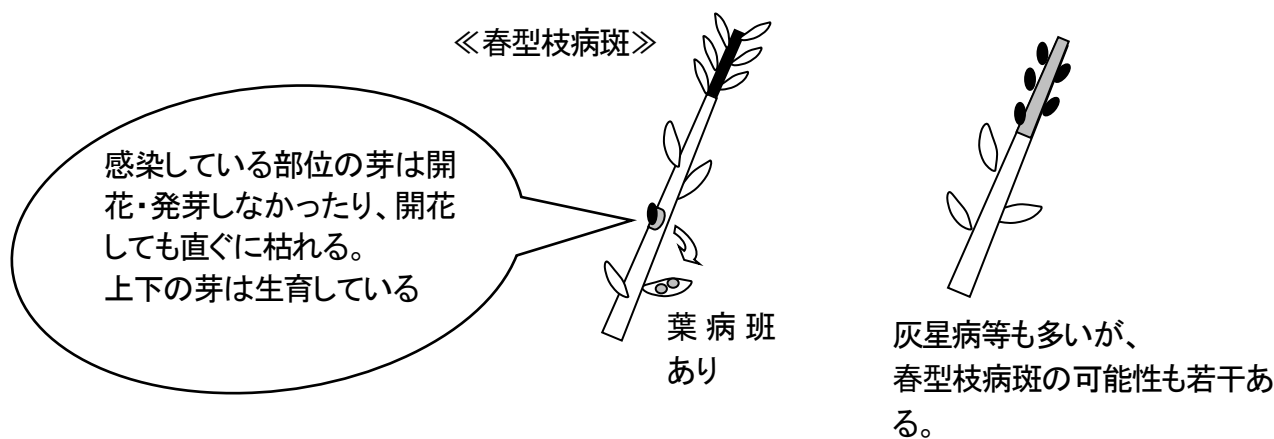
1. 病害特徴と感染・春型枝病斑と葉への感染症状の特徴

- 1) 細菌の感染によって発生する病害。
- 2) 強い風雨で葉に傷がつき、また細菌が飛び散り感染する。
- 3) 弱い「黄金桃」、「極晩生種（白根白桃、あぶくま等）」「川中島白桃」、「あかつき」等の品種は特に注意。
- 4) 春型枝病斑は開花期頃から現れ、芽基部がやや陥没し、薄い黒褐色を呈する。5月中下旬頃には黒色の典型的な病斑となる。枝病斑は芽基部に発生し、陥没してひび割れる。ヤニを噴出することもある。

※枝先端に花腐れ・枝枯れしているものは、灰星病の可能性も高いが、せん孔細菌病である事もある。

いずれの場合でも剪除は必要。

- 5) 葉では始めに葉脈で区切られた不整形の斑点ができ、淡褐色～紫褐色の斑点となり、やがて病斑部分が乾いて抜け落ち不整形の穴になる。



2. 防除対策

- 1) 薬剤防除だけでは防ぎきれない難病害であるため、耕種的防除が重要になる。
- 2) 耕種的防除として、春型枝病斑の剪除が最も重要になる。できるだけ、早く剪除し感染拡大防止を行う事で、かなり被害を軽減できる。発病は6月までだらだらあるため、2～3回程度に分けて、園内の巡回し病斑切除を行う。
- ① 結果枝をよく見る。花腐れ症状がある、芽の基部周辺が褐色に変わっている、亀裂がある、ヤニが出て いる等を確認し、病斑を確認する。見つけたら、病斑部より、3芽程度多く切る。
- ② 葉に病斑がみえたら、上部、又は周辺部に必ず春型枝病斑が存在するため、確認する。
- ③ 風当りの強い園や、園の外周部に多いので、特によく確認する。
- 3) 剪除した病斑部は、できるだけ園外持ち出したり、土中または焼却処分する。
- 4) 袋掛けも果実感染を防ぐ、重要な方法。発生が多い園は、早めに袋掛けを実施する。
- 5) 薬剤防除は、前述した通り、効果は完全ではないが、重要。なお、散布量をしっかりと撒く事。
発生の多い園外周もしっかりと撒く事は重要。



写真の○印部分が、被害例です。

地域全体による一斉防除により防除効果を高め、せん孔細菌病の感染を減らそう！！

1本の樹で5か所程度のせん孔細菌病枝病斑があれば、その樹の果実へのせん孔細菌病の発生は甚大となる。園に行く時はせん定ハサミを常に持ち歩くこと。